

2025 指導員検定会第3会場 講評

A班講評 班長 長嶋啓貴

●総合滑降

ほとんどの受検者が80点の合格ラインを超えていましたが、不合格となった受検者には、ポジショニング、エッジング、荷重動作に甘さが見られました。その結果、ターン後半にラインが落ちてズレ幅が大きくなり、ターンを仕上げることができない状態でした。一方で、高得点を獲得した受検者は、ポジショニング、エッジング、荷重動作のバランスが非常に優れており、中には際立って高得点を得た受検者もいました。

●プルーグボーゲンからベーシックパラレルターンへの展開

プルーグボーゲンまでのバランスは良好な受検者が多かったものの、その後の展開において外スキーへのエッジングが不十分で、スキーの横方向へのエッジングになってしまい、結果として内スキーを引き寄せる形になってしまった受検者が見られました。また、荷重動作がうまく行えず、ポジショニングの入れ替えに失敗して後傾姿勢に陥るケースも少なくありませんでした。その結果、パラレルターンに移行した際にテール側の操作が中心となり、スキーの横ずれが多くなる受検者が見受けられました。

高得点を得た受検者は、ポジショニングが優れており、外スキーへのアプローチに一貫性がある滑りを見せ、見事なターンを実現していた受検者も数名見られました。

B班講評 班長 斎藤克彦

●プルーグボーゲン

指導員検定会のプルーグボーゲンは速度推進の動作要領となっておりますが、外スキーへの荷重動作とエッジングによりしっかりとコントロールされた等速でなければなりません。しかしありエッジングが甘く徐々に加速してしまい最終的に内スキーのエッジが返ってしまいパラレルに近い形が出てしまった方が多くいました。また、それとは逆にカービングを意識し過ぎたのか脚部の内旋と足首の角度が強すぎて過度なエッジングになっている方も見受けられました。適正な重心位置（両スキーの真ん中）、荷重動作とエッジングによる等速でスムーズな操作が推進要素を引き出す大きなポイントです。この理解を深めていきたいところです。

●システムターンからベーシックパラレルターンへの展開

新種目となり緊張感ある検定でしたが、みなさん非常に良くトレーニングを積んで来て

いたなと感じました。システム動作でのポジショニングからターン姿勢（パラレル）移行する運動がスムーズに行われ、確実に展開してきた方には高い評価をいたしました。また、評価が低かった内容としてシステムでの切りかえポジションがパラレルのポジションに生かされず内側に入り過ぎていたことです。外スキーの荷重感とエッジングが弱く回転弧ではなくズレが多くなってしまったというところが課題になるのではないでしょか。併せて展開することなく滑ってしまったパターンも多く見受けられました。

C班講評 班長 大森宏樹

●横滑りからBPの展開

急斜面に対応できず前後のポジションが崩れローテーションしている方が多くみられた。

よってしっかりとエッジングが出来ず下方向への移動があまくなっていた。

良かった点では、展開からのベーシックパラレルターンに関しては、ターン前半から捉えしっかりとターン弧を描いている方もいました。

●小回り不整地(ナチュラルバーン含む)

ナチュラルバーンを滑ってきた方へ

しっかりとターン前半からの捉え、エッジング、荷重され弧を描いてる方には合格点が出ていました。

逆にテール振り、スピードオーバーされている方には合格点は厳しいものとなりました。

コブ斜面に関しては、しっかりと前半の捉え弧を描いてきた方には、加点になっていました。